

出家佛教在家佛教と道元禪師の立場

保 坂 玉 泉

出家佛教と在家佛教とは古來原始佛教時代から二流併立し或は対立して現代に及んだ。殊に日本佛教鎌倉期以後は二大信仰としてあざやかに競い立ち、各々其特色を發揮し夫々教化の使命を果たしえたが、徳川期以後漸く其特色を失い面目を失墜し、折角の在家佛教も出家の形態を装い、反之出家佛教も在家佛教に拘泥して共に立宗當初の信力を失い、思想的にも教化面でも衰頽の一途を辿りつつある。

現代雲の如く起りつつある新興宗教は一面社會民衆の要求に基くが他面舊佛教に飽らざる反動思想に因ることは否定出来ない。而して此新興宗教の中で佛教系のものが甚だ多いが、これらは何れも在家佛教の形態を取つてゐる。是れ元より從來の出家佛教に満足せざるは勿論又舊在家佛教にも飽らずして新機を求めるものでなければならぬ。

是れが刺戟か反動か、舊在家佛教を再興せんとする運動即ち新佛教運動ともいふべきものが一方に擡頭しつつあり。これは弱體ながらまず順當なものと言える。他方舊出家佛教は

是等の間に處して本來の面目を没却して顧みざるに非るかを恐れる。即ち自力難行の生命本質を恢興するに寄りて教團の形態のみ出家に擬裝して内實の信行を失い、頹廢自滅の運命に在り、強いて在家出家不平等の空理空論を固執して敢て自家の面目を糊塗している。社會有識の批判を仰ぎたい。

是の如きは現代宗教信仰界に益少く害多し、仍て茲に先ず兩者本式の特質を明かにし進で在家佛教の唯一人たる我が道元禪師の出家道の眞髓を明鏡ならしめんとする、これ本論構成の目的である。

而して之が文獻資料は甚だ廣汎なれば繁を恐れて前舉しないが、論文中大小乘經論及『正法眼藏』諸卷所引に就て了知せられたい。

一 出家道と在家道との比較

遷したから、大體原始佛教部派佛教大乘佛教各の出家在家思想、更に中國日本の出家在家思想の時代觀を考慮しつつ比較區別することが必要である。

(1) 名義及人衆に就て

最初から佛教々團は比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆から構成せられ聲聞阿羅漢の比丘比丘尼の二衆を出家と名づけ、後二衆の優婆塞優婆夷を在家と名づけた。素より前二衆は家を離れ専ら教團内に生活し、後二者は家庭に在居して佛陀及教團に近事するものであつた。大乘佛教時代に菩薩道の起るや、これに亦出家の菩薩と在家の菩薩とを分ち「一には假名菩薩」には實義菩薩、假名菩薩とは在家の菩薩、實義菩薩とは出家の菩薩なり」(優婆塞戒經名義菩薩品—大正藏二十四卷一〇四一A)とし、前記四衆に對立し遂にはそれに代つたことは次の如くである。

如「佛所說菩薩二種一者在家二者出家、出家菩薩名爲比丘、在家菩薩名爲優婆塞」(優婆塞戒經受戒品—大正藏二十一四、一〇五〇B)

原始教團の四衆は何れも佛陀を以て本師とし四衆皆同列の弟子にして師は唯だ佛一人であつた。然るに佛陀を去る後の大乘時代に至つては出家菩薩在家菩薩共に師となつて弟子を有することが出來た。但し出家者が僧俗二衆の弟子を有することが出來るのに反し、在家者は唯だ俗弟子のみを有し得ることが出來るのに反し、在家者は唯だ俗弟子のみを有し得る

が出来ないとした。(同上攝取品—大正藏二十四、一〇四六B取意)

(2) 教團生活の様式に就て

先ず教團の實生活に於て原始教團の出家者は衣服(袈裟)、飲食(行乞)、臥具(阿蘭若等住處用)、醫藥(施藥)、の四依四供養の嚴格なる規律生活、即ち禁欲苦行の生活の中につて生死を厭離し解脱を目的とした。反之在家者は家庭に在居し禁欲苦行とまではいかないまでも五戒八戒を行つて多少物欲を自制し生死の中にあつて生天受樂の果を願つた。比丘衆の前記四供養の奉施は此在家者の義務であつた。斯く在家と出家とはその實生活に於て格段の相違があつて、これから種々なる比較對照が起るのである。

大乘に於ても出家菩薩の四依四供養の生活を四無垢性と名づけその功德を賞揚した。『大乘本生心地觀經』に、

智光當知、出家菩薩亦復如是、剃除鬚髮、形同嬰兒、執持應器、依他活命、身著袈裟如被甲冑、杖錫而行、如持鉢稍執智慧劍……一切三毒利箭不入真實沙門之身、出家菩薩以三觀門修忍辱行、名眞出家、……云何名爲四無垢性、衣服臥具飲食湯藥、如是四事隨有……云所得、麤細稱心、遠離貪求、(無垢稱品—大正藏三、三一三B)

と云い、諸佛の三十七菩提分法は皆この四依の生活より生じ

三寶を常相續不斷ならしむとし、次で四依の功德として法衣
袈裟の十種勝利、常行乞食の十種勝利、恒服棄藥の十種勝利、
阿蘭若の十種勝利を委説した後、

若有淨信善男子善女人得聞如是四無垢性甚深法門受

持讀誦修菩薩行紹繼佛種使不斷絕命終必

生知足天宮奉勤彌勒證不退位龍華初會得聞正法

授菩提記速成佛道（同上一大正三、三一五C）

と説き、在家者が出家菩薩の四無垢四供養を信施すれば、その功德により兜率に生天し未來成佛の記を受くといひて、大乗でも依然として出家の生活様式は四依であり、在家者の第一義務は信施であり、その目的は生天に在ること各々の根本性格に變りは無い。

道元禪師は『袈裟功德』卷に於て右『心地觀經』の十種勝利を引證して袈裟の功德を賞揚せられた。

おほよそ速證法王身のとき、かならず袈裟を著せり、袈裟を著せざるもの法王身を證せることむかしよりいまだらざるところなり。

と、「速證法王身」の文は『觀經』の文を直承せられるものである。從來大乗でも四依著袈裟はその性格として出家者に限られたが、道元禪師にありては廣く、

在家の男女なほ佛戒を受持せんは五條七條九條の袈裟を著すべし、いはんや出家人いかでか著せざらん……畜生

なほ佛戒を受くべし袈裟かくべしといふ、佛子なにしてか佛衣を著せざらん、しかあれば佛子とならんは天上人間國王百官をとはず、在家出家奴婢畜生を論ぜず、佛戒を受持し袈裟を正傳すべし、まさに佛位に正入する直道なり。

（傳衣卷）

と傳唱せられた。『袈裟功德』『傳衣』兩卷には六祖直傳の寶林祕藏の佛衣をば唐國王の恭敬禮拜したこと、我が聖德太子が在家身にして搭袈裟された事實を記し、前記の如く著袈裟には在家出家の差別を撤せられた。蓋し禪師の立場は大小乗の四依の生活一純然たる出家道を繼承しつつ之を恢弘し在家道を出家化し、益々出家道を高揚せられたものである。

(3) 修道の徳目に就て

佛道實踐の徳目は種々の分類法がある中、戒定慧の三學を以て一切徳目を攝し盡し僧俗共に之を行うことを原則とするが、實際の方法としては在家道は戒學を主とし定慧に至らず、反之出家道は三學並修を要するのである。佛陀が四諦、八正道、三十七菩提分法等の徳目——戒定慧の三學に攝めらる——を示されたのは聲聞比丘等を對象としたもので在家者の受學するところではなかつた。佛は別に在家者の修道の徳目として六念の中施論戒論生天論を説かれた。蓋し四諦八道菩提分法は解脱への道であるから之を目的とする出家比丘の專修の道であり、生天を目的とする在家道にありてはその福德の

勝縁として施と戒とを行わしめられた。但し之は一般在家道の原則であつて特例なきにあらず、一時佛は郁伽長者に端正法として施と戒と生天法を説き已つて、彼が歡喜心乃至勝上心一向心あり更に正法を堪受する能力あるを知り、佛彼の爲に諸佛の正法たる四聖諦を説くや、長者は直に法を覺り疑惑を斷じ證果を得た（中阿含十九郁伽長者經一大正藏一・四七九C）例もあつて、在家者を出家道へ誘導し生天より解脱へ向上せしむるのが佛陀教化の究極目的であつたことは勿論である。

(4) 布施と六度に就て

布施行は元來是在家道の第一義務で、出家道のものではなかつた。それは施物の内容は四供養の財物施であるから、教團の出家比丘は受者ではあつても施者でない、無所有者比丘には布施は不可能であつた。故に施は専ら在家道の德目で、三論の首位に置く所以である。『優婆塞戒經』に

善男子、出家之人唯能具足五波羅蜜、不能具足檀波羅蜜、在家之人則能具足、何以故一切時中一切施故、是故在家應先修悲、若修悲已當知是人能具戒忍進定智慧、若修悲心難施能施云云（悲品一大正藏二十四・一〇三六D）

とあつて、大乗に至ると菩薩道本來の德目として六波羅蜜が行ぜられるが、依然として布施波羅蜜をば在家道治業とし、施を除いた他の五度を出家道に屬した。從て施等六度の德本として修悲を必要とし、之を以て施を専行する在家道に屬し

た。之に對し恐らく出家道の德本として修智を考えたものであろう。

大乘に至つては原始佛教以來の在家道の施等の三論に代つて菩薩の六度行が用いられた。特に三論と六度に通ずる布施行は第一德目であつたから、愈々在家道に專屬するようになつた。優『婆塞戒經』自利利他品に「在家の菩薩は能く多く人を度するも出家の菩薩は則ち是の如くならず」とし、その理由として三乗出家の人の出家修道持戒誦經坐禪皆在家の布施の莊嚴の力に由るとし、更に

出家菩薩爲在家者「修三行於道」、在家之人爲出家者「而作二法行」、在家之人多修二法、一者受二者施、出家之人亦修二法、一者誦二者教（自利々他品一大正藏二十四・一〇四四A）といふて、布施行を介して出家在家の區別をなし、兩者は財施に於ては受者施者立場を異にし、財法二施に於ては各々特爲を分たねばならなかつた。然し六度は菩薩の必須行であるから出家菩薩と雖も何等かの形に於て施度を行わねばならぬ、さりとて財施は不可能であるから自然法施の考が起つた。兎も角財施は出家比丘には不相應の行であるから、『心地觀經』にあるような托鉢施物の分與、身肉の布施などが出家菩薩の布施度と見らるるに至つた。

(5) 戒に就いて、

出家比丘は波羅提木叉二百五十條の具足戒を行ずるに對し

在家男女は五戒八齋戒を持すれば足れりとする。五戒とは不殺生、不與不取、不婬、不妄語、不飲酒の五戒である。之に加うるに不過時食、不處高廣之床、遠離作倡伎樂香華塗身の三戒を以てし毎月六齋日を期して五戒にて兼ね行う、之を八齋戒といふ。此出家戒と在家戒とはその數量に於て遙に多くの相違があるが實質的には同じものである。前者の中殺、盜、婬、妄の四波羅夷と後者の五戒とは殆ば同じ禁止條目である。元來比丘の具足戒はその教團生活者の法律で、その四依四供養の生活に於ける犯罪禁止法の規定であつて、その中四波羅夷重罪を犯せば僧權剝奪教團擯斥放逐される、云わば宗團的死刑である。反之在家の五戒は人倫五常に當る人道の德目であり八齋戒は制欲節儉の經濟道德であるから、若し破戒しても素より教團の制裁を受けず反省告白懺悔で事足るのである。教團の衣食住藥の四依の生活は無所有生活、分配生活、共同生活態であるため、之れが犯罪は頻繁でありその禁止條目及懲罰法も甚だ複雑を極めるわけで、實際に二百五十戒を保つことは難事とせられる。従つて具足戒はその性質上出家に限られていることは言ふ迄も無い。斯くの如く出家は戒律の點で遙かに差違があるので、兩者は之によつて區別される。

大乘菩薩戒に二種あり、瑜伽の三聚淨戒と梵網の十重八十輕戒である。兩者共に在家出家共通の戒法で區別を立てないから戒法に由つて在家出家の優劣を見ないのみならず全く

平等なりとする。『瑜伽論』に

云何菩薩一切戒、謂菩薩戒略有三二種、一在家分戒二出家分戒是名ニ一切戒、又即依ニ此在家出家二分淨戒一略說三種、

一律儀戒二攝善法戒三饒益有情戒（瑜伽師地論卷四十一大正藏三〇・五一一A）

三聚淨戒を持つことは在家出家平等であるが律儀戒中別解脫律儀に於ては出家在家の七衆はそれぞれ戒體が異なることは勿論である。此律儀戒は小乘戒であるが、瑜伽のこの三聚菩薩戒は小乘戒を包含したものである、之に反し梵網菩薩戒には小乘を含まず純大乘戒なりとする。前者を三乘大乘とするに對し後者を一乘大乘といい、後の三一權實の諍日本大小戒壇の爭の原因となつた。然し兩戒とも僧俗に平等であることは依然變りは無い。但だ單獨に律儀戒だけ受持する小乘と小乘律儀戒をも含む大乘とは在家出家を問わずその價值遙に差異があるといふ、

如く是菩薩所レ受律儀戒、於ニ餘一切所レ受律儀最尊無上無量無邊大功德藏之所ニ隨逐、第一最上善心意樂之所ニ發起、普能對ニ治於一切有情一切種惡行、一切別解脫律儀、於ニ此菩薩律儀戒、百分不及レ一…………鄧波尼殺曇分亦不及レ一、攝ニ受一切大功德故。（瑜伽同上一大正藏三〇・五一五A）かかる優劣は菩薩の律儀は他の攝善（作善）・饒益（利他）の二戒と共に行われる三聚戒なるに反し、他の小乘の別解脫律

儀は單獨にして作善・利他の二門を缺くからである。

(6) 修道の目的に就て

前にも屢々觸れたように修道の目的に於て在家と出家とは格段の相異があつた。佛陀の初轉法輪の直後、耶舍及其父母が歸佛したが其時、「佛は耶舍の爲に四聖諦を説き、塵垢を遠離し法眼淨を得せしめ、父の爲には施論戒論生天論乃至四諦を説き同じく法眼淨を得せしめ、父子共に三歸五戒を受けて

入團した。耶舍は在家染累出家不著の示により出家比丘となり解脱を得て第七阿羅漢に列し、耶舍の父次で母は在家にして初めて優婆塞・優婆夷となり、佛教教團に初めて三衆が成立した」（五分律第十五一大正藏二十二・一〇五A）

此記事は佛教に初めて出家在家の三衆が成立しただけに佛教々團の在り方、在家出家の基本的性格を定めた。殊にその目的として在家は生天を目的とし、出家は解脱を目的とする

ことが常道とされた。釋尊が在家化導の方法として生天受樂の説をなされた記事は『增一阿含』その他に多く發見される

が、これは佛陀が在來印度國民の固有の生天信仰に逆らわざるのみか、それを巧に利用して施戒の徳は勝報を得る善果とされたものである。従つて生天論は在家道の方便説で佛法の究竟理想ではなかつたので、佛は在家道の進むに順つて更に高き目標を示して向上誘導されたのであつた。

生天を方便説とはいふものの、佛陀は寧ろ從來の生天信仰

の上に佛法の解脱涅槃觀を加上し印度思想を統攝融會し飛躍發展せしめられたものである。三界説には欲界六天上二界の八天が戒定慧の三學に配せられ、阿邏羅仙等の四禪八定の生天の目的をより高き滅盡定の解脱涅槃へ進めた事、而して解脱の因果過程としての四向四果の賢聖の依處を色無色界となした事等、佛教の世界觀、理想觀、道義觀いづれも皆生天論を根底としているのである。

畢竟在家の常道としては生天を目的とするものの究竟地ではないから、大乘の教判家は人天教なるものを設けて五戒十善を行因とし六欲天に生れ受樂すると之を人天の勝果なりと判定し、その果は盡くることがあるから有漏の因は猶天を仰ぐ矢をいるが如く勢力盡きぬれば矢却て落つと抑へ更に佛向上へ導くのである。

二 在家出家の優劣

前説兩者の比較に於て原始部派佛教時代に在りては出家道を優位と觀、在家道を下位に置いたのは教團組織から當然の事であつた。

(1) 在家道の高揚とその批評

然るに大乘に至つては在家道が高揚された。蓋し『維摩經』の編纂によつて在家菩薩の權化維摩居士頓に出現し、いたく在家道が高揚せられ出家聲聞は勿論却て彼の爲めに彈訶せら

れ、出家文殊菩薩も辛うじて維摩の意に契うた程であつたからである。故に果然として兩者の優劣比較が佛教の問題となつた。此問題を委説細論したものが、『大乘本生心地觀經』である。

『心地觀經』は、「王舍城五百長者（在家）が、大乘菩薩

（出家）行たる苦行を樂わざる理由として、出家菩薩は父母を離れ家國を棄つる故に世の四恩を知り報ゆる能わず、故に在家に劣るならん」との疑に端を發し、種々なる方面から在家出家の優劣を批判している。（報恩品一大正藏三・一「九六D」）特に此經の中では智光長者なるものが代表的間者として『維摩經』文意を引き

佛大慈悲、於二時中_ニ在_ニ毘舍離城_ニ爲_ニ無垢稱_ニ說_ニ甚深法_ニ……心清淨故世界清淨……以_ニ心爲_ニ主……忍辱爲_ニ衣慈悲

爲_ニ室、……如是白衣雖_ニ不_ニ出家_ニ……如是之人此則名爲_ニ在家出家_ニ（厭捨品一大正藏三・三〇六A）

と/orて『維摩經』所記の通りに舉げて、維摩居士は實は『在家の出家』であるとしてその優位を認めている。

「智光は在家出家二菩薩を對比し出家は在家中に及ばざる理由として、輪王（在家）位を捨てて出家入道したために、世界は空虚になり人民は依怙を失い苦境に入つた、出家菩薩は無慈悲にして一切衆生を憐愍利益せずとして、輪王を暗に佛の前身釋迦菩薩に擬して質問をしている。是に對し佛は、

出家菩薩が在家に勝ること無量無邊比と爲すべからず、その理由として出家菩薩は第一に正慧力を以て微細に在家所有の種々なる過失を觀察するし、在家菩薩の居る三界は火宅なりとして誠めておられる。」（厭捨品一大正藏三・三〇六A以下取意）。

道元禪師は右の問題を次の如く提唱された。

みずや維摩老もし出家せましかば、維摩よりもすぐれたる維摩比丘をみん、今日はわづかに空生舍利子文殊彌勒をみる、いまだ半維摩をみず、……一維摩いまだみずしらず、一維摩いまだ保任せざれば維摩佛をみず、……維摩いまだこれららの光明功德みえざることは、不出家のゆゑなり、維摩もし出家せば、これらの功德あるべきなり、（眼藏三十七菩提分法）

これは遙には『維摩經』を、近くは『心地觀經』の文を取り意を承けて、在家の維摩は出家して成佛せざる故に出家の佛世尊に遠く及ばずとして、

あるいはまたあまりさへは維摩と釋尊とその道ひととおもいへるおほし、これをいまだ佛法をしらず、祖道をしらず、維摩をもしらずはからざるなり…………しかあれば如來の一默と維摩の一默と相似の比論すらおよぶべからず（同上）

といわれ、やもすれば在家優位とする思想を抑え『心地觀

『經』の出家優位の思想を一層高揚せられたものである。

(2) 方便化導の優劣

『心地觀經』には在家菩薩は常に巷街にある故、その化導は廣く民間に及び大膽にも姪室屠肆の巷に親近して濟度利益が可能であるとし、暗に『維摩經』方便品の説相を用い居士の方便化導を賞揚し出家の菩薩は之れに如かずとした、

求_ニ菩提道_ニ有_ニ菩薩_ニ、一者在家_ニ者出家、在家菩薩爲_ニ欲_ニ化_ニ導姪室屠肆_ニ、皆得_ニ親近_ニ、出家菩薩則不_レ如_ニ此、然此菩薩（出家）各有_ニ九品_ニ、上根三品皆住_ニ阿蘭若_ニ無間精進利_ニ

益有情_ニ、中下二根諸菩薩等、隨_ニ宜所_レ住方處不定、或住_ニ

蘭若_ニ、或居_ニ聚落_ニ、隨_ニ緣利_ニ益安_ニ穩衆生_ニ（波羅蜜多品一大正藏三・三三二B）

即ち上根の出家菩薩は阿蘭若の座を立たず他受用報身の如き説法をなし、中下二根は應身的化導をなし向上向下權變自在にして遙かに在家に勝ると断じてゐる。蓋し在家の長處を以て出家の短處を衝くが如きも、巧に之を辨釋して出家道を高揚している。

(3) 布施行の能否

又六度行は菩薩道必須悉修の本質的道徳にして、その一を缺くも菩薩の資格を失うほどのものである。然るに痛手の事には布施檀度は小乘以來財施である限り、無所有生活の出家は布施受者ではあるが素より施者ではない、布施は寧ろ不可

能である。然れば出家は菩薩行に缺くる所あり、是如何との難問題に對し、佛は、

住_ニ阿蘭若_ニ出家菩薩、入_ニ於聚落_ニ所_レ乞之食、先以_ニ少分_ニ施_ニ於衆生_ニ又以_ニ餘分_ニ施_ニ於所欲_ニ、即得_レ名_ニ爲_ニ檀波羅蜜_ニ、以_ニ自身命_ニ供_ニ養_ニ三寶_ニ、頭目髓腦施_ニ來求者_ニ……是名_ニ出家菩薩成_ニ就布施波羅蜜多_ニ（波羅密多品一大正藏同前）

と答えられ、布施は財施に限らず身命施もあるとし釋迦菩薩身肉布施の本生因縁を香わし出家布施度の思想を高揚せられた。

(4) 發菩提心の難易

『優婆塞戒經』でも出家在家の二菩薩の優劣を種々なる觀點から比較してゐる。「在家人の發菩提心は阿羅漢辟支佛に勝れ、諸天がその發心を見、人天師を得たりとして驚喜する程であるが、然しそれは實に難值難事である。反之出家者の發菩提心は難事にあらず、その理由は出家には惡因縁なきも、在家は惡因縁に纏遠せらるるが爲なりとしている」（集會品一大正藏二十四・一〇三五B取意）。惡因縁とは家事世事治生產業等のことをいう。次で菩薩の要道六度行の生因たる慈悲心を修むる難易に就て、在家の人は同じく惡因縁多い爲に出家人に比して修悲困難なり、從つて優婆塞戒を得ることも困難なりと誠めてゐる。大乘の『優婆塞戒經』と雖も依然として出家の優位を認めてゐる。

(5) 瑜伽論の在家出家比較

『瑜伽師地論』菩薩地に於ても前掲『優婆塞戒經』と同筆法で又諸菩薩或在家分或出家分、雖復同於如是四法正勤修學上、而出家者於在家者甚大殊異甚大高勝、所以者何、當

知一切出家菩薩、於其父母妻子親屬攝受過患、皆得解脫、在家菩薩則不_レ如是云云（瑜伽論第四十七一大正藏三十・五五

一B）

在家の菩薩は家族親屬商估王事等の繁累俗務に鉤鎖束縛せられ梵行を修する能わざるも、出家は皆解脱することを得清淨なる律儀に安住し、一切菩提分法を行じて通慧を速證するとして依然出家の優位を示している。因に『瑜伽』の菩薩戒は『梵網經』のそれと異り、三聚淨戒であつて此中第一攝律儀戒とは正に七衆の別解脱戒であるから大乗出家菩薩は勿論比丘の二百五十戒を受くるが、在家菩薩も優婆塞夷の五戒八齋を持つ必要ありとせられる。今在家が律儀梵行を修するの困難なりといふは律儀戒なき梵網菩薩戒からはいわれない。即ち梵網戒では戒に因る眞俗の區別はない、從て優劣の判も立たないのである。

三 道元禪師の出家道觀

道元禪師の出家道觀は『眼藏』『廣錄』其他の御撰述に散見

出家佛教在家佛教と道元禪師の立場（保坂）

亦廣說されていて全撰述が出家道の提唱と見られるが、その中専ら出家道を主説されたものは「袈裟功德」「傳衣」「三十七菩提分法」「出家」「出家功德」の諸卷である。よつて既に前項にも問題によつて一分引用したが、次下は専ら禪師の出家道觀のみを擧げる。

(1) 出家の性格に就て

出家生活の基本的様式に就て禪師はその出家行法に四種ありますいはゆる四依なり、一盡形壽樹下坐、二盡形壽著_二糞掃衣、三盡形壽乞食、四盡形壽有_二病服_二陳棄藥……一生不離叢林なるはすなはちこの四依の行法そなはれり……

：（出家功德）

と。四依四供養の生活は原始佛教以來の僧行なること前述の如し、禪師は原始教團の様式を叢林の行法準規とせられた。この四依の生活を禪師は正業道支といわれた。「三十七菩提分法聞解」は

正業道支は出家修道なり入山取の證なり………出家して阿耨の道を修證する正業なり、雲居の云ふ居山好の道理を得て見れば、世間にも出世間にも山はある、此山に入て證を取るが正業道支なり」と註して四依の中先ず居山入叢樹下修證を賞揚した。然らば出家は何を修證するか、曰く、

正業道支は出家修道なり、入山取證なり、釋迦牟佛言、三

十七品是僧業、僧業は大乗にあらず小乘にあらず、僧は佛僧、菩薩僧、聲聞僧等なり。（三十七菩提分法）

この三十七道品が原始佛教以來大小乗を通じて出家道の必須徳目であつて在家道に非ざることも亦た前屢說の如し。禪師の出家道は此點からも正傳の佛法なりといえる。此道品の實際は如何、

僧業といふは、雲堂裏の功夫なり、佛殿裏の禮拜なり、後架裏の洗面なり、乃至合掌問訊、燒湯するこれ正業なり（同前）。

三十七道品は結局八正道に攝まる、八正道はその正業に攝まる、正業の實踐は畢竟三十七道品の實踐である。禪師の修道は萬里一條鐵である。故に出家の高きこと佛法の直系なること遙に在家の及ぶ所にあらずとして、

いまだ出家せざるもののが佛法の正業を嗣續せることあらず、佛法の大道を正傳せることあらず、在家わづかに近事男女の學道といへども、達道の先蹤なし……維摩居士……龐蘊居士……李駘馬、楊文公……如來の道を慕古していそぎて出家修道し佛位祖位を嗣續すべし、禪師等が未達の道をきくことなれ。（菩提分法）

餘の禪師等やもすれば在家在家同等の説をなし殊に往々維摩を出家以上に優越ならしむるものなきにあらず、禪師は『眼藏』諸處に在家者にも説法し在家の篤信を賞讃せらるる

も決して眞俗平等視せられたるにあらず。斯文の如く代表的竺旦の居士を抑えて出家を勸奨しておられる。蓋し禪師は原始佛教以來の在家道は人天教で解脱目的の三乗出家道への方便道に過ぎず、佛法の究竟道ではないと確信して出家道を高揚せられておる譯である。

(2) 在家より出家へ進む。

出家修道の起原は遙かに釋尊以前の婆羅門の教學課程につた。即ち彼等は第一梵志期に五明を學び、第二家居期に結婚生活家業經營をなし、世嗣が出來れば第三期出家生活が許され山林に入りて苦行をなし、最後に第四思辨期に進んで禪定止觀等を行ずる、此間は乞食頭陀等による供養を受けて生活する。故に佛陀は唯だ從來の婆羅門の教學修道に則つて出家乃至苦行修禪せられたもので、八相成道の歴史過程は必ずしも釋尊の發明ではなく、ただ釋尊のみ完行され改良され爾後出家生活は佛道の專用になつた。『出家功德』の卷に

この轉輪聖王かくのごときの快樂ゆたかなれども、かうべにひとすぢの白髮おひねれば、くらゐを太子にゆづりて、わがみすみやかに出来し袈裟を著して、山林に入りて修練をきくことなれ。

とあり、この輪王の出家過程は釋尊の實際行跡を表現したものであることは言うまでもないが、出家生活は釋尊を介して印度刹帝利王族の慣行となり、寧ろ釋尊一門の主義美風とな

つた。『大涅槃經』三十三に佛陀は善星の出家聽許に因み、我於三徃昔初出家時、吾弟難陀、從弟阿難、調婆達多、子羅睺羅、如是等輩皆悉隨我出家修道。(迦葉菩薩品—大正藏十二・五六三A)

これ釋氏一族の出家である。禪師は『出家功德』にこの事を引き

しかあればすなはち衆生は親疎をえらばずただ出家受戒をすすむべし、のちの退不退をかへりみざれ、修不修をおそるゝことなれば、これまさに釋尊の正法なるべし。

と示され、出家は佛法の常道であるのみならず、在家人の進取すべき理想であるとし、

しかあるを人間にうまれながら、いたづらに官途世路を貪求し、むなしく國王大臣のつかはしめとして一生を夢幻にめぐらし、後世は黒闇におもむき、いまだたのむところなきは至愚なり。

と主張せらる。これ元より人間一般に就ての御意見であるが、この文底には禪師の親族攝關公家の頂門の一針と窺われる、禪師と釋尊と族姓出家の行跡大に類するものがあるからその出家觀も亦相一致するものがあつた。但し、在家王侯公家長者居士の出家は實際は容易ならざれば、特例として、禪師は『傳燈』第一第四祖優婆塞多尊者の條より「身の出家心の出家」の事を引き、同第三第十七祖僧伽難提尊者の條よ

り「在家の出家の稱」あるを認め、その實例として一應代宗、肅宗、盧居士、龐居士とを擧げられたが、盧氏は遂に出家して六祖となつたから、

盧公の道力と龐公が稽古と比類たらず、あきらかなるはかならず出家す、くらきは家にをはる、黒業の因縁なり。

といひ、何處迄も出家優位を高調せらるること前記『心地觀經』『優婆塞戒』『瑜伽論』等とその軌を一にし、出家道は在家道の當然進取すべき向上邊なりと斷ぜられた。

(3) 成佛の必須條件としての出家道

出家の目的が解脱に在ることは原始佛教以來の定説なること前屢々述べた所であるが、之は却て解脱には出家を必須條件とするとも考えられる。同様に大乘佛教の目的は成佛に在るから、出家を成佛への必須條件とせられるのが道元禪師の主張である故に禪師は『出家功德』の卷に於て廣く大小乘經を涉獵して之を論證せられた。

禪師は出家學道は釋迦牟尼佛の誓願なりとし『悲華經』卷七や『大乘悲分陀利經』卷六の釋迦佛の五百大願中出家學道に關する大願二三を擧げ、出家は如來の誓願なれば最尊最上なりと讚し、『法華經』序品の日月燈明佛の八子、「化城喻品」の大通智勝佛下の十六王子、「妙莊嚴王品」の二王子、「善見律毘婆娑」卷十七の千釋の出家の記事を引いて出家受具を證せられた。

又『佛本行集』經卷十八より悉多太子の出家剃髪染衣の事を引いた後、

三世十方諸佛、みな一佛としても在家成佛の諸佛ましまさず

と言われ、更に之を反證して

聖教のなかに在家成佛の説あれど、正傳にあらず、女身成佛の説あれどまたこれ正傳にあらず、佛祖正傳するは出家成佛なり。

と断定された。在家成佛の説女身成佛の説は眼藏註家は典據未考としているが、嚴密に云えど在家は必ず出家して成佛する女身は男子に變成し次て出家して成佛するのが定則である、龍女成佛の如きも出家の形を取り未來成佛するのである。故に經文に一見在家成佛女身成佛の如き説あるも實は然らず、故に嚴密には經文にその説ないのが當然であつて、禪師がその説を「正傳にあらず」と断定せられたのも、註家が未考といふのも共に正しい、寧ろ出家が成佛への必須必具なることを反顯して妙なりといふべきか。

出家成佛の義を禪師は更に禪錄を引いて、

禪苑清規云、三世諸佛皆曰「出家成道」……然則參禪問道、戒律爲先、既非「離過防」非何以成佛作祖……諸佛諸祖の命脈ただこれ出家受戒のみなり……（出家）。禪苑清規第一云、三世諸佛皆曰「出家成道」……さらに

出家せざる三世諸佛おはしまさず………（出家功德）『禪苑清規』の三世諸佛出家成道の事は恐らく遙かに『長阿含』大本經の過去七佛の八相成道の説を承けたものである。

(4) 出家在家の優劣

『大智度論』卷十三戸羅波羅密品（大正藏二一十五・一六〇c）には、在家戒と出家戒とを比較し出家戒の絶對優位を断じ、出家の破戒は在家の持戒に勝ると極言し、其事例として『優鉢羅華比丘尼性經』中の蓮華色比丘尼前生破戒今生出家得道せし因縁と醉婆羅門戲作出家の因縁とを出だしているが、禪師は『出家功德』の冒頭に其全文を掲げ、袈裟の功德を贊し出家受戒を勧められ又『出家』卷には後者醉婆羅門の因縁のみを擧げて『佛化はただ出家それ根本なりいまだ出家せざるは佛法にはあらず』と決擇された。又『出家功德』の卷に

古聖云、出家人雖「破禁戒」猶勝「在俗受持戒」者上………したとひ毘舍首陀羅なれども出家すれば刹利にもすぐるべし………帝釋にもすぐる在家戒かくのごとくならず。

とあり、出家は四姓平等のみか天帝にも勝るといわれた。「三十七菩提分法」は出家の正業道支たる三十七道分を提唱せられたもので、これは在家道ではない、從て成佛道への道程を正業とする出家道の優勝なること勿論であるから、此卷には

各方面から之を論斷されている。即ち在家心と出家心と一等なりといふ經卷の文も佛祖の道取もなきこと、在家得道せるものなき洪範として曹谿古佛、崇山高祖古佛、大師釋尊を擧げて佛位はこれ出家位なりと断じ、帝者の僧尼を禮拜するも僧尼答拜せずと王者不可拜を論じ、未出家の輩は出家者に身命を捨て奉観給仕敬禮供養すべし等々、出家道の絶對優位を主張せられた。

既に是の如く出家最勝の功德あるを證すべく『出家功德』に

世尊言、南洲有四種最勝一見佛、二聞法、三出家、四得道。

世尊言、於佛法中出家果報不可思議、假使起七寶塔、高至三十三天、所得功德不如出家、何以故、七寶塔者貪惡愚人能破壞故、出家功德無有破壞云云（賢愚經第四の文）を引き、西天竺國刹利種姓の出家者を數えあげ、

閻浮提（南洲）最第一の尊貴より三界第一の尊貴に歸するは出家なり………

と讃揚せられた。

(5) 眼藏違文の會通

上來の如く禪師は出家道を成佛への必須條件とし又從て出家優位を證し反面在家道を下位に在ることを明かすべく、諸卷に於て大小諸經論の關係文獻を博引考證せられたから此點

何等疑う餘地なきも、二三他の御撰述中に必ずしも然らざる一見違文がある。之を如何に會通するか例えば「辨道話」に於ける「佛法を會すること男女貴賤をえらぶべからず」「身の在家出家にはかかはらじ」と断じ、代宗順宗及李相國等の世務が坐禪辨道をさまたげず「ただ世中に佛法なしとのみしりて、佛中に世法なきことをしらざるなり」とある御文を如何に會通するか。又「禮拜得體」の卷に於ける比丘尼の得法者を禮拜するについて「ただしいづれも得法を尊重すべし、男女を論ずることなれば、これ佛道極妙の法則なり」とい、宋朝得法の居士を出家雲衲が禮拜せしことを引證し「たとひ女人なりとも畜生なりともまたしかるべき」とい、例の龍女成佛の例を出されているが、是御文を如何に會通するか。

以下筆者の卑見僭評を述べる。結論から云えど禪師一代說法の中、前說『辨道』・『禮拜』の二本の說は後說『出家功德』の說に包攝決擇されたもの故、前者を未盡理とすれば後者を盡理の說とする。更に前二書の内容に就て比較するに『辨道』は主として在家を對象として說かれ坐禪辨道には在家出家平等なりとし、『禮拜』は主として出家人を對象として男女比丘比丘尼の平等を說かれたもので、未だ出家成佛男子成佛の重點的特論に及ばれなかつた。然し禪師の修道觀の第一義諦から言えど成佛道には無條件に眞俗男女貴賤の差別のありようは無い、唯だ指導隨宜の方法として且く對機的に差別

を説かれたものである。此點は『出家功德』の卷も専ら出家

せられた。

人に對する隨宜説法であるといえる。即ち眞の成佛道者は非俗非眞非男非女相でなければならぬ、而して又此非相即ち眞

出家であり非相即成佛である。「禮拜得體」に於ける志閑禪師は非男非女等相の末山了然尼を禮拜求法したことは有名である、眞出家は非男非女、尊卑の論に及ばぬ。又前述の如く

禪師は身出家と心出家と在家の出家出家の在家をも認められた、つまり非色非心の出家、非俗非眞の出家をば第一義的出家と觀られた。是等を反顯すれば亦色亦心の出家、亦俗亦眞の出家、非男非女の出家ともいふことが出来る。故に畢竟道元禪師ご提唱の出家道は形の問題にあらず時間の長短を論ぜず即得成佛道である。果然、禪師は般若經の左の要文を引證

佛言、復次舍利弗、菩薩摩訶薩、若欲出家日卽成阿耨多羅三藐三菩提。云々（大品般若序品一大正藏八・二二〇C）

大般若經第三曰佛世尊言、若菩薩摩訶薩、作是思惟、我於何時、當捨國位、出家之日卽成無上正等菩提。云々（大正

五・一六B）

此文に次で「おほよそ無上菩提は出家受戒のとき満足するなり、出家の日にあらざれば成滿せず……出家の日のうちに三阿僧祇劫を修證するなり」と。這箇出家道の極意に到つては、還つて依然として「佛法を會すること男女貴賤をえらばず」「身の在家出家にかゝはらざる」こととなる。